

REPORT

第2日目 レポート (7/20)

シンポジウム 2

「最近問題となった人と動物の共通感染症」
7月20日 10:00～13:00 / コンベンションホール



座長 吉田 博氏



加藤康幸氏



高崎智彦氏



前田 健氏



宮川昭二氏

人と動物との関わりは、伴侶動物や産業動物だけではありません。毎年、ニュースにも取り上げられているウイルスによる感染症の問題も、さまざまな動物や昆虫を介して人に影響を与える大きな課題となっています。とりわけ、エボラ出血熱、デング熱、中東呼吸器症候群 (MERS)、SFTS は、私たちにも身近な問題として近年日本でも大きく報じられてきましたが、その実態を一般市民が深く知る機会はありません。

1976年にアフリカの中央部で見出されたエボラ出血熱は、昨年、リベリアの大統領から非常事態宣言が発令され、国家を揺るがすほどの危機的な状況であったことは、私たちの記憶に新しい出来事です。WHO チームの一員としてリベリアに派遣された加藤氏は、医療機関のみならず、医師や物資が足りない中での医療行為を紹介しつつ、これまではジャングルに隣接する小さな村だけで治まっていた感染が、アフリカの奥地まで広がった車社会によって都心部へと広がっている可能性も示唆されました。こうした背景には、近年増加の傾向を辿っているリベリアの人口に対する食料の確保や生活スタイル、交通手段の変化なども関係しているようです。

昨年、国内で流行の兆しを見せたデング熱の媒介蚊となったヒトスジシマカは、通常から日本国内に多数生息していますが、気候の変動によって年々その生息域の分布北限は北に移動しており、他にも日本で発生している新興感染症として、O157 やノロウイルス、HIV、E 型肝炎、トリインフルエンザ (H5N1)、新型ヤコブ病、そして今年になって韓国で発生した MERS などがあげられます。

また、ダニを介して感染が拡大するダニ媒介感染症も私たち

の身近に潜む感染症のひとつで、2012年には国内で致死率の高い重症熱性血小板減少症候群ウイルス (SFTSV) による感染が報告されました。特にペットなどに付着したダニから人に感染する可能性が指摘されていますが、きちんとした知識を持って未然に感染を防ぐ対策を行なうことが重要です。

さまざまな感染症が世界各国で流行する可能性が高まっている要因のひとつとして、簡単に遠距離を行き来することができる世界の航空事情などが挙げられています。これらのことは、便利さを求めて技術の革新を行ってきた人類への警鐘なのかもしれません。これまでウイルスの研究や予防策の開発は一部の専門家の仕事とされてきましたが、今後、新たなウイルスのリスクに対して国民全体で情報を共有し、国や専門機関との連携による危機管理意識の向上が不可欠といえるでしょう。

シンポジウム 3

「災害に強い日本型畜産の構築のために」
7月20日 10:00～13:00 / 会場：ラウンジ



座長 大山憲二氏



犬飼史郎氏



吉泉 努氏

産業動物と私たち人間の生活は、切っても切れない密接な関係にありますが、普段、畜産について一般市民が思いを寄せることはほとんどありません。スーパーに行けばお肉や牛乳、卵が手に入ることが当たり前になっていますが、災害が起きた時の対応はどうなっているのでしょうか。災害に強い日本型畜産の構築をテーマに、4名の演者の方が発表を行なって下さいました。

大型動物である家畜の飼育には、私たちの知らない多くの苦勞が日常的に行なわれています。例えば、牛1頭の糞尿は人間100人分に相当し、出荷前の牛は700kgにもなります。災害時ともなれば、家畜たちも興奮しており、取り扱う側にも命の危険が伴います。それらを安全に被災地から移動させるためには、専用のトラックと技術者が必要になり、1台のトラックには、12頭ほどしか乗れません。トラックがあっても、災害時はガソリンが手に入らず、その移動には、私達が考えもつかない困難が伴います。家畜改良センターは、通常は、家畜改良や有料種畜、